



大きな歴史的なうねりを

7月10日に行われる参院選は、本誌が發送される7月11日にはその結果が出そろっています。争点隠しにより、国の形が変えられようとしているにもかかわらず、保守勢力は一定の改憲可能な力を温存するでしょう。ダブル選が行われるとの見方もありましたが、当然、この場合には憲法改「正」の争点は避けられませんし、前回の衆院選は民意が反映されないままの結果でありましたから、圧倒的多数を確保している「衆議院での賭けは行えない」、と自・公は考えたのでしよう。

さて、参院選の結果がどうであれ、安倍政治を陰で操る超右翼勢力や経済界が憲法改悪を今後本気になって推し進めることは間違いありません。

「特定秘密保護法」成立以降、次々と強権手法がまかり通ってきました。「無理」を承知で政治を進めても、国民は黙って政権に追隨してくる（愚民政策）、そう考えてきたのです。

だが、着実に労働者の闘いと怒りが広がりを見せてきました。今は小さな動きに見えますが、潮目が変わりつつあります。一時は反動的であった司法も、労働契約法20条で闘っている労働者を巡って、風向きを変えてきました。労働者の諦めない闘いがその流れを変えてきたのだと思います。ほぼ全面的に労働者が勝利してきたことです。

この闘いの火種を組織労働者が受継げば歴史に大きな変化のうねりを生み出せるでしょう。

『月刊まなぶ』企画編集委員 飯田 邦雄